

2019年度 研究センター事業報告書

研究センター名	地域健康社会学研究センター
---------	---------------

I. 研究成果の概要（公開項目） ※1ページ以内にまとめること

本欄には、研究センターの実施した研究の成果について、その具体的内容、意義、重要性等を、項目立てなどをおこないできるだけわかりやすく記述してください。

1. 地域健康社会学プロジェクト研究の推進

寄付研究プロジェクト（2016年4月発足）時の主旨を引き継ぎ、住民の参加・協働による地域健康創出をめざす基礎的研究、歴史・実践研究、現状分析・方法開発の総合的な研究を行った。予防要因分析を通して政策構築に資する疫学研究の手法を用いて健康創出の社会的課題を明らかにするとともに、次の諸課題にわけて研究を推進した。

1. 京都における地域健康の歴史と実践
2. 福島の経験にもとづく地域健康づくりの現代的課題の追究
3. 地域健康社会学の創出と総合人間学の基礎的研究

2019年度の主な取り組みとしては、当センターと滋賀県健康医療福祉部と協定を結び、滋賀県の健康福祉データの分析を行った。2013年から2017年までの5年間の国民健康保険医療費データ、国保特定健康診査データ（特定健診データ）、介護保険受給データを使用し、個人番号で紐づけを行い、①各年の動向、②2013年の医療費データをベースラインとして、この対象者に2013年の特定健診データ、介護保険受給データ、2014年から2017年の特定健診データ、介護保険受給データを紐づけしたコホート研究データを作成した。

分析の結果、特定健診を受診していない群は、その後の医療費で入院かつ外来を受けている割合が高く、対して特定健診を受診している群は、外来医療のみを受けている割合が高かった。背景には、健康診断受診可否といった社会格差があると思われるが、市町村が実施する国保特定健診である点から、より積極的な受診勧奨が課題として明らかになった。一人当たりの医療費が特定健診未受診群で、受診群より約2倍高かったことから、受診勧奨を実施することで、その後の医療費の使われ方にも影響があることが分かった。

また、2013年に特定健康診査を受診し自立していた者を、2014年以降の各年を追跡し、肥満度（BMI）がと介護保険受給との関連リスク比を算出した。男性でやせ群は基準群に対して介護受給にいたるのは4.8倍（95%CI:2.2-10.5）高かった。やせはその後介護にいたりやすいことが分かった。

同じく同年4月に、医療・福祉問題研究会（松田亮三氏）主催、当センター共催で、研究会「アメリカにおけるリプロダクティブヘルスサービスへのアクセスと低所得者へのケア」研究会を実施した。医療関連法を専門とするノースカロライナ大学公衆衛生大学院・ディーン・ハリス教授を招聘し、2018年12月に続き、米国の医療機構、特に低所得者へのケアとリプロダクティブヘルスの問題について講演会を開催した。

教育としては、教養ゼミナールを担当した。当大学学部を超えて、公衆衛生学分野の話題を文学・社会学系の学部生への学びを通して、自らの専門への自覚を高めるとともに、他の専門の特色を理解することで、より広い視野で自らの専門を見ることができると目指した。「データの見方は地域の味方」というテーマで、公衆衛生学、疫学を紹介し、エビデンスの視点の重症性と質的研究の両立を強調した。当センター客員協力研究員の日高友郎氏にゲストスピーカーとして役割を担った。

2. 外部資金獲得の推進

センターの運営資金として寄附金を保有するほか、厚生労働行政推進調査事業費等を獲得している。また、個別の研究課題推進のため、科研費への申請も積極的に行った。センター長の早川が滋賀医科大学との共同研究を行い、疫学、公衆衛生学の観点から地域医療の可能性を模索するとともに、産学官連携や外部資金の獲得を見据えた研究を行った。

3. メディア媒体を使用した発信及び社会貢献

研究所ウェブサイト、ソーシャルメディアにおいての積極的な発信を行うとともに、各メディアの特性を生かした独自の情報発信についても工夫や分析を行い、より効果的な情報発信に努めた。

また、2016年7月より取り組んでいる地元ラジオ局の番組について、2018年度からは放送拠点を京都三条ラジオカフェに移し、引き続き小学生目線で観た地域の高齢者への作文を発信した。これらの作文を蓄積し、また、地域における高齢者の存在意義を抽出していくことで、高齢者・子ども・地域の役割を明らかにし、地域社会への貢献と研究素材の抽出を相互に行った。また、ラジオ番組での取り組みを契機に小学生への出前授業を行い、日本の高齢化問題に対する相互理解を深めた。これらの成果発信を通じて、放送の対象である地域社会への直接的効果はもとより、間接的に他の地域社会への貢献も可能とした。

4. その他研究活動とその展開

滋賀県は全国平均寿命都道府県ランキングで日本有数の長寿県である。2017年度より、滋賀県衛生科学センターから「滋賀県データ活用事業プロジェクト会議」メンバー（座長）の就任依頼を受け、健康や医療、介護など滋賀県健康寿命延伸のための各種データを一体的に分析・活用し、市町や件における予防的な取り組みの推進を図っている。

滋賀県健康医療福祉部医療保険課が県下市町に実施している、国民健康保険運営方針等検討協議会保健事業部会で学識経験者として参加し、運営方針に対して助言を行っている。

また、福島市を始めた自治体にて、「地域に責任を持った保健活動の強化」をテーマとして講師を務めるなど、各種団体における講演依頼や委員委嘱依頼を積極的に受け、研究の今後の展開につなげている。

II. 拠点構成員の一覧（公開項目）※ページ数の制限は無し

本欄には、2020年3月31日時点で各拠点にて所属が確認されている本学教員や若手研究者・非常勤講師・客員研究員等の構成員を全て記載してください。区分が重複する場合は二重に記入せず、役割が上にあるものから優先し全て記載してください。また、若手研究者の条件に当てはまる場合は、必ず若手研究者欄に記載をしてください。

※若手研究者とは、立命館大学に在籍する以下の職位の者と定義します。

①専門研究員・研究員、②補助研究員・RA、③大学院生、④日本学術振興会特別研究員(PD・RPD)

役割	氏名	所属	職位
センター長	早川 岳人	衣笠総合研究機構	教授
運営委員	中村 正	産業社会学部	教授
	松田 亮三	産業社会学部	教授
	サトウ タツヤ	総合心理学部	教授
学内教員 (専任教員、研究系教員等)	開沼 博	衣笠総合研究機構	准教授
	山口 洋典	共通教育推進機構	准教授
	中妻 拓也	総合心理学部	助手
学内の若手研究者	専門研究員・研究員		
	補助研究員・リサーチアシスタント		
	大学院生		
	学振特別研究員(PD・RPD)		
その他の学内者 (非常勤講師・研究生・研修生等・博士前期課程院生等)			
客員協力研究員	日高 友郎	衣笠総合研究機構 地域健康社会学健康センター	客員協力研究員
	富澤 公子	衣笠総合研究機構 地域健康社会学健康センター	客員協力研究員
研究所・センター構成員	9 計 名	(うち学内の若手研究者 計 0 名)	

III. 研究業績（公開項目）※ページ数の制限は無し ※to be published,の状態の業績は記載しないで下さい。

本欄には、「II. 拠点構成員の一覧」に記載した研究者の研究業績のうち、拠点に関わる研究業績を全て記載してください。(2020年3月31日時点)

1. 著書							
No.	氏名	著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	その他編者・著者名	担当頁数
1	中村 正	社会病理学の足跡と再構成	分担執筆	2019年10月	学文社	日本社会病理学会監修/朝田佳尚・田中智仁編	139-167
2	サトウタツヤ	Money for Ordinary Things - Clean or Dirty? Money: Ordinary Things but Deeply Culturally Embedded Phenomenon. In Giuseppina Marsico and Luca Tateo (Eds.) Ordinary Things and	共著	2019年6月	Information Publishing Age	Tatsuya Sato, Hideaki Kasuga, and Akinobu Nameda	145-156

		Their Extraordinary Meanings (Annals of Cultural Psychology), Chap 8.						
3	サトウタツヤ	ワードマップ 質的研究法 マッピング	共編著	2019年9月	新曜社	サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実	1-272	
4	サトウタツヤ	法と心理学への招待	共著	2019年12月	有斐閣	サトウタツヤ・若林宏輔・指宿信・松本克美・廣井亮一	1-263	
5	サトウタツヤ	心理学・入門 [改訂版]	共著	2019年12月	有斐閣	渡邊芳之	1-18, 21-46, 91-126, 194-212	
6	サトウタツヤ	Birth of Trajectory Equifinality Approach (TEA) and the Pocket Money Project: Effort to Theorize the Flow of Time. In Takahashi and Yamamoto (Eds.) Children and Money Cultural Developmental Psychology of Pocket Money	単著	2020年3月	Information Publishing	Age Tatsuya Sato	159-170	
7	松田 亮三	The Atlas of Health Inequalities in Japan	分担執筆	2020年1月	Springer International Publishing	Ryozo Matsuda, Shigeru Inoue, Hiroyuki Kikuchi, Yuri Ito, Tomoki Nakaya et al.	161-245	
8	松田 亮三	刑事施設の医療をいかに改革するか	分担執筆	2020年2月	日本評論社	赤池一将編著	506-527	
9	松田 亮三	刑事施設の医療をいかに改革するか	分担執筆	2020年2月	日本評論社	赤池一将編著	375-407	
10	山口 洋典	『ファシリテーションの教科書』(「ストーリーテリング」, 「堂本印象旧邸宅の活用～四面会議システムを用いた地域経営への事起こし～」, 「AoH (アート・オブ・ホスティング) ～誰もがやさしく、かしこく社会を導いていく知恵～」)	分担執筆	2019年10月	昭和堂	山口洋典(鈴木康久・嘉村賢州・谷口知弘編)	30-31, 122-125, 174-177	

2. 論文								
No.	氏名	著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行年月	発行所、発表雑誌、巻・号数	その他編者・著者名	担当頁数	査読有無
1	中村 正	臨床社会学の方法(25) 情状を問うことの意味-ナラティブと動機の語彙-	単著	2019年6月	対人援助学マガジン(10巻1号)	中村正	21-29	
2	中村 正	性暴力加害者をなくすための「教育」からみた支援	単著	2019年7月	日本性科学会雑誌(37巻1号)	中村正	13-23	
3	中村 正	臨床社会学の方法(26) 認知的不正義-加害者更生のために-	単著	2019年9月	対人援助学マガジン(10巻2号)	中村正	22-33	
4	中村 正	ハラスメント加害者の更生はいかにして可能か-加害者への臨床心理社会的な実践をもとにして考える-	単著	2019年11月	日本労働研究雑誌(労働政策研究・研修機構)(712号)	中村正	86-97	
5	中村 正	臨床社会学の方法(27) 家族問題と治療的司法	単著	2019年12月	対人援助学マガジン (対人援助学会) (10巻3号)	中村正	20-27	

6	中村 正	臨床社会学の方法 (28) 男性同士の関係性-男どうしの親密さと脱暴力-	単著	2020年3月	対人援助学マガジン (対人援助学会) (10巻4号)	中村正	21~29	
7	サトウタツヤ	転機研究における「個人と社会との相互作用」のアプローチ	共著	2019年4月	キャリア教育研究(37巻2号)	土元 哲平, サトウ タツヤ	35-44	
8	サトウタツヤ	[心理学史 諸国探訪] イタリア	単著	2019年4月	心理学ワールド(85号)	サトウタツヤ	29	
9	サトウタツヤ	福島、ふくしま、Fukushima (5) 対人援助学&心理学の縦横無尽 (26)	単著	2019年6月	対人援助学マガジン(36号)	サトウタツヤ	86-96	
10	サトウタツヤ	[心理学史 諸国探訪] タイ	単著	2019年7月	心理学ワールド(86号)	サトウタツヤ	29	
11	サトウタツヤ	[心理学史 諸国探訪] インドネシア	単著	2019年11月	心理学ワールド(87号)	サトウタツヤ	29	
12	サトウタツヤ	質的アプローチに対するのは量的アプローチではなく、統計量アプローチではないか? 対人援助学&心理学の縦横無尽 (27)	単著	2019年12月	対人援助学マガジン(39号)	サトウタツヤ	80-87	
13	サトウタツヤ	心理学史におけるナラティブの役割	単著	2020年1月	N : ナラティブとケア(11巻)	サトウタツヤ	11-21	
14	サトウタツヤ	[心理学史 諸国探訪] デンマーク	単著	2020年2月	心理学ワールド(88号)	サトウタツヤ	29	
15	サトウタツヤ	成長の瞬間を生み出す「よいキャリア支援」の意味感覚:TAEステップを用いた理論構築	共著	2020年3月	質的心理学研究(19巻)	土元哲平・小田友理恵・サトウタツヤ	46-67	
16	サトウタツヤ	「利他の心」に基づく社会の実現に向けて 稲盛経営哲学は何をもたらすのか?: フィロソフィの共有・浸透における抵抗勢力の役割	共著	2020年3月	立命館大学稲盛経営哲学研究センター研究成果報告集2015年度-2019年度(1巻)	山浦一保・サトウタツヤ・河野達仁・河井 亨	14-17	
17	サトウタツヤ	「ものづくり」に質的研究はどう貢献できるか?—ものづくり質的研究の構想について	共著	2020年3月	立命館人間科学研究(41巻)	隅本雅友・安田裕子・斎藤進也・神崎真実・菅井育子・サトウタツヤ	29-37	
18	サトウタツヤ	東京電力福島第一原子力発電所事故にともなう長期避難の実態—2017年第2回双葉郡住民実態調査—	共著	2020年3月	東京大学大学院情報学環紀要情報学研究・調査研究編(36号)	丹波 史紀, 佐藤慶一, サトウ タツヤ, 清水 晶紀, 関谷 直也, 廣井 悠, 除本 理史, 安本真也		
19	サトウタツヤ	盛和塾企業における稲盛経営哲学の浸透	共著	2020年3月	立命館大学稲盛経営哲学研究センター研究成果報告集2015年度-2019年度(1巻)	サトウタツヤ・澤野美智子	24-27	
20	サトウタツヤ	Situational Experience around the World: A Replication and Extension in 62 Countries	共著	2020年	Journal of Personality	Daniel I. Lee, Gwendolyn Gardiner, Erica Baranski, Erica Baranski, Members of the		

						International Situations Project and Funder,D.C.		
21	松田 亮三	高齢期の健康格差縮小に向けて―「誰一人取り残さない」社会保護から備える	単著	2020年1月	連合総研レポート(33巻1号)	松田亮三	10-14	
22	松田 亮三	医師の「働き方改革」―医師労働力と医療供給をめぐる複合的政策課題	単著	2020年3月	医療福祉政策研究(3巻1号)	松田亮三	29-37	
23	山口 洋典	PBLの風と土:(9)サーブ・ラーニングは中道を歩むもの	単著	2019年6月	対人援助学マガジン(10巻1号)	山口洋典	207-212	
24	山口 洋典	大学地域連携による学生住民の地域混住を通じたコミュニティの活性化	共著	2019年7月	都市住宅学(106号)	山口洋典・赤澤清孝・深尾昌峰	14-23	
25	山口 洋典	PBLの風と土:(10)穴を埋めるのではなく良い点を伸ばして	単著	2019年9月	対人援助学マガジン(10巻2号)	山口洋典	208-213	
26	山口 洋典	PBLの風と土:(11)自らの未知なる環境に身を置いてみよう	単著	2019年12月	対人援助学マガジン(10巻3号)	山口洋典	180-185	
27	山口 洋典	地域参加学習において言語化を促進する意味とその方途	単著	2020年1月	立命館言語文化研究(31巻3号)	山口洋典	73-87	
28	山口 洋典	PBLの風と土:(12)手続きや内容より関係構築にこそ重点を	単著	2020年3月	対人援助学マガジン(10巻4号)	山口洋典	197-202	

3. 研究発表等					
No.	氏名	発表題名	発表年月	発表会議名、開催場所	その他発表者名
1	中村 正	On the Necessity for Combining Therapeutic Justice with Clinical Family Social Work Regarding of Child Abuse and Domestic Violence	2019年7月	The XXXVIth International Congress on Law and Mental Health	
2	中村 正	社会病理学者の職業倫理	2019年9月	第35回日本社会病理学会	
3	中村 正	男性性の傷つきに敏感なジェンダー臨床論のために(第8回・最終回)-「男らしさ」へのエクソダス(脱出)	2019年11月	第11回対人援助学会	國友万裕
4	サトウタツヤ	唾液指標を用いた妊娠期女性のストレス状態についての検討	2019年5月	日本生理心理学会大会	肥後克己, 岡本尚子, 孫怡, 妹尾麻美, 神崎真実, 川本静香, 中田友貴, 矢藤優子, 安田裕子, 鈴木華子
5	サトウタツヤ	Transition as Dynamic Semiosis: The Autoethnographic Approach and Trajectory Equifinality Modeling	2019年7月	The 16th European Congress of Psychology	Tepei Tsuchimoto
6	サトウタツヤ	Transition to professional and career change in the era of career diversification	2019年7月	The 16th European Congress of Psychology	Taiyo Miyashita
7	サトウタツヤ	Voices of the Analysis: Alternative Orientation of Analytic Autoethnography	2019年8月	The 18th Biennial Conference of The International Society of Theoretical Psychology	Tepei Tsuchimoto

8	サトウタツ ヤ	「共感」についての印象の 検討 セマンティックプロ フィールを用いた印象の特 徴についての検討	2019年8月	日本パーソナリティ心理学会第28回大 会	中妻拓也
9	サトウタツ ヤ	教員志望学生に対するキャ リア支援モデルの生成 — —大学教師へのインタビュー —による探求——	2019年9月	日本心理学会第83回大会	土元哲平
10	サトウタツ ヤ	(DVD 放映) 欲望の文明か ら利他の文明へ	2019年9月	日本心理学会第83回大会	
11	サトウタツ ヤ	1950年代までの日本にお ける「共感」研究の動向と 転換点・1952年 前田論 文の提言による転換点	2019年9月	日本心理学会第83回大会	中妻拓也
12	サトウタツ ヤ	キャリア多様化の時代にお けるプロ人材への変容とキ ャリア転換?	2019年9月	日本心理学会第83回大会	宮下太陽
13	サトウタツ ヤ	発言者と被発言者の性別が 第三者のセクシュアル・ハ ラスメント認識に与える影 響	2019年9月	日本心理学会第83回大会	武田悠衣・中田友貴
14	サトウタツ ヤ	質的研究において「意味」 を問う方法	2019年9月	日本心理学会第83回大会	
15	サトウタツ ヤ	Dialogical Tension Within a Japanese Language Teacher at the September 11 Attacks	2019年9月	The 2nd Transnational Meeting on Trajectory Equifinality Approach	OZAWA, Ikumi,
16	サトウタツ ヤ	質的研究 (TEM) の実習デ ザイン——5日間で伝わる こと・伝わらないこと	2019年9月	日本質的心理学会第16回大会	神崎真実・菅井育子・隅本雅友・斎藤進 也・安田裕子
17	サトウタツ ヤ	ものづくりと質的研究方法 論の再考～「ものづくり」 に質的研究はどう貢献でき るか?	2019年9月	日本質的心理学会第16回大会	隅本雅友・菅井育子・神崎真実・斎藤進 也・安田裕子
18	サトウタツ ヤ	自動車・顧客を対象とした TEA (複線径路等至性アプ ローチ : Trajectory Equifinality Approach) の 適用事例について	2019年9月	日本質的心理学会第16回大会	菅井育子・隅本雅友・神崎真実・斎藤進 也・安田裕子
19	サトウタツ ヤ	セクハラ的情動性が司法面 接で聴取した耳撃証言に与 える影響	2019年10月	法と心理学会第20回大会	武田悠衣・中田友貴
20	サトウタツ ヤ	Auto-TEM for Understanding Career Support in Transition	2020年3月	The 3rd Transnational Meeting on Trajectory Equifinality Approach	TSUCHIMOTO, Teppei,
21	松田 亮三	The Japanese welfare mode: changes and continuities in the “lost decades”	2019年7月	The 16th East Asian Social Policy Research Network Conference	Masato SHIZUME Masatoshi KATO
22	松田 亮三	Gradual Tunings for Sustainability: Japanese healthcare reform since the late 1980s	2019年7月	The 16th East Asian Social Policy Research Network Conference	
23	松田 亮三	医師労働力をめぐる政策— 理論と経験	2019年8月	日本医療福祉政策学会第3回研究例会	
24	松田 亮三	『バブル経済』破綻後、医 療はどのように改革された か—財政機構を中心に—	2019年12月	日本医療福祉政策学会第3回研究大会	
25	山口 洋典	【研究報告・実践報告】災 害	2019年6月	日本NPO学会第21回大会	萬代由希子・岡村こず恵・菊池遼・土崎 雄祐・石井大一郎・妻鹿ふみ子・山口洋 典
26	山口 洋典	公募シンポジウム「震災経 験の意味を考究することは	2019年9月	日本心理学会第83回大会	日高 友郎、木戸 彩恵、辻内 琢也、増田 和高、齋藤 清二、山口 洋典

		被災者支援にどのようにつながるか?」(指定討論スライドタイトル:「忘れ去る」ことのできない構造と状況の中で当事者と研究者が相まみえる作法)			
27	山口 洋典	Sense making Metaphorical Thinking on Networking in Disaster Revitalization: From the Narratives of 10 Years Activity in Shiodani village, Ojiya, Niigata Japan	2019年10月	The 10th conference of the international society for Integrated Disaster Risk Management (IDRiM 2019)	Hironori Yamaguchi, Tomohide Atsumi and Yoshihiro Seki
28	山口 洋典	ワークショップ「ポスト活動理論のパフォーマンス:越境する地域コミュニティと学習する医療の交歓」(話題提供スライドタイトル:災害復興過程におけるメタファーの導入がもたらす集団力学の変容~新潟県中越地震後の新潟県小千谷市塩谷集落での10年のアクションリサーチから~)	2019年10月	日本グループ・ダイナミックス学会第66回大会	山口 洋典・山口(中上) 悦子・香川 秀太
29	山口 洋典	Helping learners verbalize their experiences by improving daily writing habits through a reflective and active service-learning curriculum	2019年10月	2019 IARSLCE Annual Conference	Megumi AKIYOSHI, Hironori YAMAGUCHI, Toru KAWAI, Mitsuru KIMURA, Seishi MIYASHITA
30	山口 洋典	多文化理解を促すための中動的言語文化と表現の可能性~Story Circlesを通じた対話的理解の省察的实践~	2020年2月	国際ボランティア学会第21回大会	山口洋典・北出慶子・遠山千佳・村山かなえ
31	山口 洋典	越境による「第三の知」創造を目指した実践—交差と衝突による変容から言語文化教育の展望を考える—	2020年3月	言語文化教育研究学会第6回年次大会	北出 慶子・香川 秀太・山口 洋典・義永美央子

4. 主催したシンポジウム・研究会等

No.	発表会議名	開催場所	発表年月	来場者数	共催機関名
1	-	-	-	-	-

5. その他研究活動(報道発表や講演会等)

No.	氏名	研究業績名	発表場所等	研究期間
1	サトウタツヤ	TEAの社会実装	キャリアテックワーキンググループ	2019年7月19日~
2	サトウタツヤ	研究倫理について	中京学院大学学内研修会	2019年8月27日~

	ツ ヤ			
3	サ ト ウ タ ツ ヤ	「当たり屋グル ープが来ている」危険伝えた い善意連鎖	東奥日報	2020年3月5日～
4	サ ト ウ タ ツ ヤ	デマ拡散どう防 ぐ 立命館大、 サトウタツヤ教 授「一歩立ち止 まって」	産経新聞	2020年3月6日～
5	松 田 亮 三	Japan's Response to the Coronavirus(11 April 2020).	Cambridge Core Blog (https://www.cambridge.org/core/blog/2020/04/11/japans-response-to-the-coronavirus-pandemic/)	2020年1月10日 ～2020年4月10日
6	松 田 亮 三	Japan's Response to the Coronavirus - Now updated (18 May 2020).	Cambridge Core Blog (https://www.cambridge.org/core/blog/2020/04/11/japans-response-to-the-coronavirus-pandemic/)	2020年1月10日 ～2020年4月10日

6. 受賞学術賞					
No.	氏名	授与機関名	受賞名	タイトル	受賞年月
1	山口 洋典	国際ボランティア学会	2019年度(第16回)隅谷 三喜男賞	声を伝える活動がもたらす新 たな活動主体形成のプロセス- 難民問題専門情報番組「難民ナ ウ!」を事例に(宗田勝也・山口 洋典による『ボランティア学研 究』19号、2019年、pp.75-86)	2020年2月

7. 科学研究費助成事業						
No.	氏名	研究課題	研究種目	開始年月	終了年月	役割
1	早川 岳人	「ライフコースを通じた現代日本人のた めの循環器疾患発症予測ツールの開発」	基盤研究(B)	2019年4月	2022年3月	分担
2	中村 正	男性性と暴力の臨床社会学的研究	基盤研究(C)	2019年4月	2022年3月	代表
3	中村 正	脱刑事罰処理を支える「治療法学」の確立 に向けた学際的総合的研究	基盤研究(A)	2019年4月	2024年3月	分担
4	松田 亮三	グローバル化の中での日本福祉モデルの 変化と継続(派遣先: The 16th Annual Conference of the East Asian Social Policy Research Network)	公益財団法人村田学術振興財団 第 34回(平成31年度)海外派遣	2019年6月	2019年7月	代表
5	山口 洋典	市民性涵養の関係性モデルを軸とした地 域参加学習カリキュラムと教授法の開発	基盤研究(C)	2018年4月	2023年3月	代表
6	山口 洋典	日本語支援者の学び解明と促進を目指し た多文化サービスラーニングの開発	基盤研究(C)	2019年4月	2022年3月	分担

8. 競争的資金等(科研費を除く)						
No.	氏名	研究課題	資金制度・研究費名	採択年月	終了年月	役割

